



誂諧句鑒拾遺

冬

中村俊定文庫
文庫 18
660
4





誹諧句鑑拾遺 冬之部

立冬

去とても菊の八寂一と朝乃冬
露もけさ角之川をれと一ゆ

梅壽
涼山

小春 小六月

志々此ねハ松ハ初海也小六月

支考



亦くちりや日乃執ハ美こと孝
質そのと笑くく月々人小は執山
小去意や十夜會式乃寺法らつ
去ちりく欠ハ如似小を侍る良
山葉氣を攝とも見ぬ小去とら
日陰なく照るや落葉此小六月
胡布乃網や小を侍の侍らうい後
雪れ峰侍らぬ雲くも小六月
中も山も浅き日侍一の小去や
長家形も小去に似たり我五十

淡く 栗堂 梅壽 文洞 龜全 涼山 一鼎 吐鳳

久々一

歌小と侍る蠅ハ泣くく少去れと良
初冬く梅雨くく山を去れ日和
四の晴乃室く飛くくと小を侍る
花のくも芽とむ小を去れ乃柳く乳
小風も帆に多うむ日や小去室
大根侍む川一丸や小六月
八市山乃陰あも里れ小を侍る乳
くハ本れ小去也きり取乃月也
蔭ハ麦侍む心も何蒙も小去月

素芹 枝静 素盈 其礼 索陽 律我 宝馬 輕舟

神の旅 神のふる

象家此伸為一かこれ月
 のりうのふ雲に何くや神送
 我修尔雨もふ也神乃留与
 神くはい戸や八重垣名をふり
 望固をくも神乃留与松を
 何れあくも寺く一南や神の留与
 神送尚風やよれ紫乃暮多ふ
 正道にまらや人も神乃留与

任口
 水吟
 公曳
 龜全
 松山
 素苻
 宝馬
 鞠人

冬二

祇室箱根より利根川に

旅橋首明く多しんかこれ月 来山

晴雨

いふ也一くきれ雲乃底古鳥
 二乃是もふ留て来ふり一時雨
 いひをらぬ一通りもや夕一と暮
 阿ふねさきと日も深きのう夕志これ
 時雨く徳村乃夕日あひけり

立圃
 知徳
 好春
 徳元
 曲菴

時なりぬ乳母のちねや少初震
志くまぬ悲し芝居の夜に段
志くぬや常氣れはるぬ小倉山
時雨ゆきししれま同れり夜
志くぬややんともいとぬ神樂堂
傘をいけくにもけしし種り菊
川とぬハれきせなりけし初し
床さぬしきくや一夜に二時雨
志くぬや月ハ障ふふありれ
兼通ししきぬけむむ古 筏

乾什 羅人 超波 采仲 梅朔 五璉 公曳 栗堂

村しき雨やとる人立川居川
淡しはよ晴雨乃雲もとる月色
志くぬや家鴨あふる折あふ川
しきぬや客まのやの巻浪音
志くぬや目もいろしきくさかくさ
魚をこれよまみちよゆふし
大粒ししあゆや照日にむく志く
村しき立上りしきと市乃人
松梅し顔すや月夜まゆし
人里れぬしき時雨ハ晴しき

亀文 冠車 素貫 素磨 凉山 素玉 雅郊 一鼎 北平

家不待く類杖寂一初一く後
 追うけてぬきくくくや初志くき
 古事れりき調ふ一く礼可那
 宿ハ畑に別て世えゆる初志く礼
 湖乃水通了斗きくめくくき
 鶴も子をいふ風情や初一く礼
 小夜志くきいと梅乞して又出を
 又くく障ハ早く気晴雨の板 庇
 魚布や志く梅中れ朝霧くひ
 雨やうりぬきくく何を初一く礼

山鳥
 宝春
 吐鳳
 宝馬
 津富
 本丹

冬四

物と冬の古事り涼一夕一く礼
 中り火を懐くか身立る初志く礼
 翔日
 夕ふくく初志く礼
 其葉

鞠人
 賀重

茶の口切

口きりれ茶物くくくく中治拾遺
 口きりや香ふ海さ茶の茶ハ志く
 口切や志くくハ舞く初志く礼
 由平
 著存
 宝馬

玄猪

まめれこも後ひ復やわのとちり
所かまや玄猪も君々我れ降
文雀
涼山

達摩忌

たねま忌々木々鼻とらる幸子いえ
連子忌々いあく跡小まんや寺
与尚まらや心ち美物のそ一物
竺舟
一雪
玉圃

十夜

野寺小も十夜なりけり夜暮人
大俗に柳子利あて十夜う孫
佛法乃るまや十夜れ場の月
津富
過橋

帰系

九月造る十々毎るのむ松ふ散
風乃神れ苗々々種らひをかへり系
重寛
定重

茶のしらべの枝もくさくさ
帰るさくさ茶の枝山乃ち
阿ふしゆよ誰り古来乃
か庭里も咲や若木のひ
北野あて
花うめや又さくさか
秋也

寒梅 室咲

室梅も得乃ららば不意ふり
佳風

さく梅も借ささくさ
咲まをを梅も室の
日月小定の初もやむら
凡引れ室も出さる儀見
栗堂
素琴
宝馬

茶茶

茶乃茶のさくさくさ
茶を今もさくさ
おにゆへにさくさ
古
紀逸
梅壽
千雪

山菜茶

山菜茶や霜の色阿弥旭 新 赤琴
きん茶やこれ枝あはれ寂一 赤玉

水儂

むらさきの雪を待てるや水仙茶 乙由
水仙乃これや玉子孔雀丁女 公曳
水仙や美人に花をまらぬを 亀文

さいしじや雪はふ負を穿くさく 寛麗
水仙の侍くきよはよ茶も志を 和 水
水仙乃跡にゆえよ月乃胡 煮 牛
露氷て露み咲るささい百人茶 都奴雅

寒茶

寒ききくや梅も出くさ茶乃茶 樓川
寒ききくや芳を穿みよは咲通 室馬
寒ききくや老きさ茶も杖はら 津宜

大根引

大根おはまゝ引まけし老角力
物とらんをとるよ大根引
湫豫乃おをれ推てたのこ
宝空にうらぬ多葉や大根ひき

涼山 吐鳳 宝馬 風馬

木枯

木枯し小石をて空に吹ゆ

霞遊

風やゆくは葉乃をま柳ま
ころりや濃積ひと引推る
木穀風や影をふ月遠角擲

順翁 公佐 桃水

落葉

紅葉散 冬木立

管乃ぬきや落葉の谷ま
隅く小鞠場の内も落葉うれ
又まゝの葉はのちを岸小橋
林くも明海くもちりぬ冬木立

梅路 梅胡 素昔 雅郊

雪をくもくもくゆきも冬も立
系もく地も北風乃雨と成に冬
猫白く落葉もくゆき夕日和
切岸乃赤土ありおちまふ時
推一本森乃赤土もくふゆき
宮古くゆきもくゆき乃落葉時
鴨柳もくゆきもくゆき乃落葉
第目乃上落葉もくゆき乃落葉
何多也落葉もくゆき乃落葉
冬も立古くゆき乃落葉のゆき

涼山
寛麗
一鼎
素竹
吐鳳

もくもく雪日和池乃ゆき
ゆきゆきの秋もゆきゆき
多もゆきを重くゆきゆき
引紐もくゆき二三段おちまふゆき
家の櫓もくゆきゆきゆきゆき
窓もくゆき山家もくゆきゆき
落葉もくゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

菊千
木丹
ト人
不言
素朝
柳水
木奴
津富
鞠人
素云

古寺

伏く面む佛も多し争きまじらむ

凉代

枯野 草枯

枯野の道や少社を引去りて
草の生や橋乃あとなを伝ふ
の生や色や松乃こもり子抱ひ
多うれや巻りけり神乃日和
枯野の道や表府佛の日の夕

仙會
北平
素荇
柳郊
素調

三昧やあのをくす神跡乃石佛
林くくや日も早御のの生跡原
妙うまや池も清く魚くろき

律富
和水
水蛙

水涸

山川やうまをく空けき神乃石
多うれや砂日地落れりて
湖や破色もうまをく八分
あうま乃塔や以て人集る

文雀
文洞
千雪
宝馬

水鳥 鴨 鶯 鶯

長池小まじかひも折一鴨乃御 立圃
夜鳥を抄や一まけりかもの夢 大草
を一鳥の五りかくと床不ふ 涼依
形をふね羽と帳子ゆくや池の鶯 龜文
水鳥の御乃丸々他志ひの 栗堂
水鳥や鶯が川乃朝日 和 煮貫
若小楫と向やうき孫れ鴨乃御 涼山
有毛らぬ葵もや氷乾池乃鶯 龜全

有もや志ひくもアを及之手際 吐鳳
水とりや浮孫かア原の芦志菰
有もやの藁や奢らぬよき一本 津富
よ波乃まゝいてのやかこれ尻 木丹

千鳥

交りハ有れ必しや友を中利 野雙
樹たかくさやこ乃三種や賀茂堤 柳居
十分に早遠さるるや川千鳥 柔仲

廊らぬしぬれ紅きぬれ次乃乃浦街 巨川
風み流く波ふいあきききききき 宝馬
何ら破ふあきいりりりりりりりり 不言

次乃

松風とまきくひあきとききりれ 蒼狐

細代

下戸あきぬれ乃火新やあきき 栗堂
汝の目も魚りや等一細代守

鯉鱒

何んかマ客もあきりも後清き 涼山
鯉鱒や道具さゆりく代客も浪 吐鳳
あききや大口きの小毒ハな

河豚

口をれも人か食とれおくと汁 白水
飯けやんは通すすそのうききき 乾什

緩ふて丈一さいおぬる夜うれ
 龜文
 なく穿ふかろや夕ア小道と少
 龜全
 大食ハ上戸なるけきぬくと汁
 涼山
 ひとと居れ肉厚やたきやと汁
 寛森
 毒有りし落着しうり河豚汁
 雅郊
 縁掛くく事さうさへ一え家来
 津富
 氣乃浩る嫁れ給仕やふくと汁
 本丹
 中事やあよ雪ふ河豚料理
 緩ふふや子と事ふこの冬去年は友
 麹人
 うち向く緩ふおや二三人
 九簾

生海氣

生海氣あし自と抄録や秘この尻
 寗里
 桶ふ見え尚たふと此冬や雪 曇
 露莖

惠比須様

惠比須様や足立のて珠ねひ
 宗岷
 東海や沖代集えんと名ひと様
 由平
 幸ひのさうひ上戸や名ひすか
 工枝女

冬 日 冬 夜

何よけん藤魚もほしる冬所を	其角
さむしるよ夜れあきやきりくは	百菴
冬のもや地くちえう家幾川	尹督
しものれや殺生るりう浪糞	素磨
冬長宗おれを是し庭乃屋	素竹

冬 月

中くとも雲のかがり夜半乃月	<small>郡山</small> 吉保
長空し雲ふくひ入海峯遠月	淡く
月けくし落くふりし雲のうへ	素貫
照りまむ文く暮夜れ月遠庭	涼山
月ほくを折ふしに只かも乃夢	、
風なくて空けをう地月夜半	松山
研ふし乃月や望地れ冬の空	寛麿
一むき乃鴨半川れは月夜し	、
帰い夕のうささか意や冬のう	手枝女
河々空し枯れを照る月の色	賀重

月夜一東寺の塔ハ夜もあは
 空月やあらぬ海も浪もな
 今昔さうらへきてはなをれら
 さは極うら月あそむる冬毎の山
 映人富

空

吹こさるく星のこ動く空か
 浅く白ハ雫子小筈く空この非
 いとく川風さむく山
 心祇 樓川

朔の日乃裾にやうくぬ空この節
 常と空を葉も露乃空この節
 やり火の沈む空をく大の中
 人知らるるく空を極乃朝
 吹こさるくく子多れき空は
 摺遠ふ教れはひき空をな
 散散れくく葉空く夕日教
 うら空く烟絶みか
 素山

千代尾 丈岡 涼山 寛麓 寶里 赤丹 孤山

素山

冬

遊子新装の目く乃冬去り
 炭たす人あとも何く冬籠
 冬籠中の客も来次飯も煮
 難波津小舟に人宛冬去り
 智恵に冬去くべし後冬籠
 福里菜も口につくし冬去り
 併もなす竹あふゆこ冬
 暮に惚く月日小珠冬籠
 其裔 樓川 寛鹿 井鳳 吐鳳 冬映 五陵 素調

窓ひとの壺中乃天よ冬去り
 其苦れ夫婦膳ま冬去り
 三十歳猶さ冬去り
 宝馬 帰鳳 沾山

火煙 炉

人乃子ハあれきぬのよ炉の色
 老るるれ力を片隅不冬火煙
 行客乃旅冬川むや冬去り
 雅郊 寛鹿 梅翁

山灰

照炭や並事とハまゝの山灰
なつゝや小跡の薄のまゝたり
炭の灰や富土をむふう以烟
奇峰 平砂 秋連

蒲巻衣

厚くとも蒲巻乃肌や母巻恩
麻のハハ字の付巻帯
貞佐 水雞

おむい入我真山乃ふとんう巻
左簾

紙衣

の甲不世やさけー紙衣も露細工
帝衣巻く四角にすのめ方々の巻
露水 宝馬

頭巾

頭巾巻く巻の巻
旧室

空の室より清く見せし角張中
二世 涼山
図兩乃ちるの何れも一や角張るん
平砂
法仰ハあそく傳うよ一丸清き心
津富

霜

岩橋乃夜れ善信や一もけり
任口
花もらん秋葉園乃秋やと山の白
重安
秋あやうや老寺れ積もはらぬ
何器
朝志もや半れとそくそけり
米仲

満目乃新もやとて伝妻想の那
公曳
秋の初や穂多さゆ秋み物派始
素貫
一天小雪れ一志も流川田はら
實森
初秋の志傳一とそりやめも産葉
素玉
川秋に志けても傳一傳乃秋
吐風
とけ秋や久一とそりもむらもら
木丹
干葉初くは秋や伏家れ登に秋
樵水
朝志もや一信さむさ馬はくそ
素元
夜了や妻明乃夏燈の火れ志傳り

雪

雪の松茸根も久しき名はるも
 見ぬ人ハさき世より山乃雪の系
 岩戸明し日本國よりゆきれそら
 江戸に柄書足見ハより阿礼不取の雪
 雪中亦なきやと一降のふかき雪
 雪をとり雨とれゆきをいひ女
 竹葉松乃おむと心ゆきれは
 旅人乃ほくハ通るは雪乃阿比

梅翁
 立圃
 望一
 伊志
 加賀
 吉勝
 尾張
 圓宅
 由平
 玄来

雪根こそ人も阿比をうけきれ雪
 大川雪やわけり雪より松乃人
 振えて山より人よりゆきれ松
 大川ゆきや移らぬとれ復は松
 山風や松をたかり雪はゆき
 大雪や百里ありとも雪は松
 山ハカハ松系乃松雪不徒なり
 雪らりし大川ゆきなり大柳
 雪の切目阿比作り松植
 初雪やよこの松向らふ合次

芭蕉
 大草
 白雲
 馬光
 樓川
 國字
 素貫
 素磨
 仙禽

たしゆゆきや義乃まきこの巻
大雪や眼の息はき小細なる
きや々休養なれ志尚柳も
雪まろめ子とと繁るよえ何れし
たてちめく心明尚雪共あり
雪一義是るよけふ乃ふも
初きや袖うちららほせに降
降雪小義をそ阿も色丸合羽
初きやけし宛ありて雪れ降
とら雪やからけぬ妻乃はきと發

涼山 寛麗 著存 一鼎 山鳥 生沾 吐鳳

我意小もてなされとけさ乃ゆき
初きやせめて巨齋のわえり同紙
清もきとやきれし井の巖も伝
積尚雪眼小るそ忽ものに詠め有
ゆきとらや昔なれ口まきと鳩もめ
なかくとたのみの雪はらるる浪雪
の雪もくまき雪やきせらるる葉思ひ
真をそ我人に訪ふやよき友宿乃雪
とらゆきとたれい物を能治る邪
初雪やちらりとるる心美人とも

赤竹 芝水 嶺克 何来 系人 木奴 楚分 奈調 笠齋 慮得

雪乃そとも雪々々ぬ山や不尼れ徳 宝馬
 言わつて室をを休めは河さうか
 雪降や滄持とるを力を曲次
 ゆき乃日や女もはるえ乃似合あめ 津富
 せれくき雨と雪のそつて人
 とい雪やのそく梅流紫乃力 ^{二世} 左藤
 六とくもちらひく
 氣とよ心雪ふ蒼蒼ハなる六中を気 来山
 雪と星形も命くくう那 樓川

雲

松杉ふもくひ阿もくくくくくく
 雲さ人流もかい強あも岩乃うへ 仙鳧
 明ふく雪と見く一秋と雲と我 露水

霞

顔かしてまじくうけくや玉あらし 嵐雪
 芦れ紫と梅といはちや玉阿らし 霞

月中佳色何處有のくし玉ありけ
喜伴と八根乃たなき雲よと川邊
夕立れ氷て降をたす河原邊

吳胡
寬麗
其葉

氷柱

清く清くあまの氷や板部清く
神の家の何れ物清く清く
明命戸乃形不照る月れ氷柱
利風不ぬく神と清く清く

公祇
尹督
糸臨
露莖

氷

おほの夜や清く清く河川むら
こほりけ雪紐乃中に清く不物
凍結初や足ぬて河をわらむ
大河のふむや今も中流の清く
花の氷やあふ流氷の清く
氷治の楳あて清くあふ日り氷
うきら氷やあふ河川乃氷
目の先けまき入る氷厚

龜齡
涼山
一鼎
霞遊
吐鳳
、
歷翁
春波

鞍 脛

鞍のあそれゆしひき山本あそ
風をいさむちのそ知るふふ人ふ脛
何くもれは是やいふく死胡凍
一 鱗 亀 齡 芦 英

糸あそ

何かりや帝朝を踏て死ふ事
一 鍊

縁耳あそ

急そ熱を力や鞍そ親の徳
桂 我

冬至

冬至りふ北極と南をこそ人の陽
亀 仙
雜煮世ハ母も来むとく冬至は和
恭 梁
冬至梅のりくや陽重一二梅
寛 之
天地ふやまむ月あなそ冬至梅
宝 馬

教身世

教又世や古きをわめて何うも
素 康

か不^レを^レや相同^一一^レ坐^レ不^レ指^レと^レ茶
顔^レ又^レも^レや茶^レ小^レお^レさ^レり^一一^レ女^レま^レく

柳 郊
桃 水

袴 著
帶 解 髪 置

ま^レく^レ指^レ急^レや五^レ乃^レ按^レ礼^レ乃^レ道
帯^レと^レき^レやま^レの^レこ^レれ^レ肩^レと^レ玉^レの^レ葉
帯^レや^レた^レや大^レ路^レの^レさ^レる^レハ^レ松^レの^レ内
袴^レ長^レや^レ色^レハ^レ赤^レれ^レや^レぬ^レを^レと^レれ^レ子
髻^レ並^レの^レ小^レ社^レと^レ古^レ一^レの^レ色^レと^レて

次 也
栗 堂
宝 馬
柳 郊
玉 卮

神 樂

秋^レ日^レや^レ鬼^レと^レり^レひ^レく^レ神^レ樂^レ節
雲^レ了^レ一^レ日^レ此^レ夷^レ乃^レハ^レ時^レ雨^レ神^レ樂^レ月

如 貞
吳 朝

報 恩 講

き^レは^レも^レ一^レや^レ和^レま^レ不^レ滞^レ分^レお^レお^レり^レ
お^レさ^レれ^レ子^レと^レ珠^レ牧^レほ^レく^レく^レお^レお^レる^レ
ま^レく^レく^レ舞^レ色^レ阿^レさ^レ龍^レお^レ一^レも^レ月

然 塵
眉 山
分 香

鐘敲

納豆きき音響しき鐘たき
 陣たけい表まら形不似ぬよの光
 風引てまゆの光とたけなき陣うき
 系よ居てあたまきあしし七陣打
 行あてハ手軽き音よ陣うき
 かまもと控しとあけり陣たき
 聖やあおと空くぬ陣半り記
 後乃世いろうのぬきんまもらうき

芭蕉
 乙洲
 馬光
 麻父
 吐鳳
 笠斎
 津富
 長虹

寒念佛

凍け自乃征みやあまふ空と念仏
 文子けり女あ忽影のん福うけ
 鬼をらめ雪た大津を空と念仏
 雪くとも後初ハ月初そ空と念仏

亀全
 涼山
 寶麗
 津富

空と念 寒深

空と念や四糸五線乃けり人
 宗岷

空しくきや妹の意地小姉乃根
冠車
定都や夜こふかき川河の縁
環齡

薬餌 鶏卵酒

麻を油してう高とりの葉喰
元奇
徇まきく夫婦別あつ葉くひ
龜文

又
夫婦中も打くけらる玉子酒
冠車
か仕社のめすけく十流玉子さる
冬九六

良葉を麻くふ側乃ふの葉ひ
素后
葱阿らふ生葉にかへむ葉くひ
徳雨

早梅

早梅小むくそとくや冬乃顔
芳室
梅ゆくやうくき冬れ日の葉を
寛麗
日梅もくむ冬も梅さく阿らふ
操舟
早梅や熱飲なる新ふも乃もく
柳郊
さたのちれ春よも早き梅のよ
素臨

燦掃

風雪や富士乃烟の燦をらひ
とととと巴とととと女
新しき政ゆもあつし燦掃
燦をさや掃納めよ人の埃
柏子きけ若者とのとと掃
燦并乃阿ととと旭
吃ましや燦ととと日たあを筑波
庶親迦え入庶を内自ととと掃

忠知
涼山
龜全
寛麗
鳳臺
吐鳳
不言

際掃

自らおハ柳うららに枯るるのな
候はるや七帝ふかき之布ふのし
ちらつとと親乃代とととととと

如貞
白杪
龜仙

年忘

月長おときさハ明るる年忘
し一系いさく初や子をとととと

龜文
冠車

三節季候

されきたるふあゝるるるー三節季候
子節季候よよよよよよよよよよよ
三節季候をせせせせせせせせせせ
せきそらや年彼よよよよよよよよ

混合

紙衣とくう片ききにたりな衣 配 祇 祇 祇

岩橋の夜とも大東乃とくー
旭いす真れれりきや松一
空室に物をもつや賜乃去
茶時のころちや枇杷梨の志
枯芦や已らわらむと風懐おと
温石也年れくや子よよの孫子
木の葉これ地ふ露るーぬ社
危あもあはてや月れ夜無引
海これ火や互了了是もさう遠

栗堂 仙禽 文洞 素玉 山鳥 笠庵 不言 五陵

冬 雜

六 けきたよ 昨 走 沖とらめ乃承
記 出て 事 止けり力や 是 家 路 寺 人
朝 見よ 雲 ねも 阿ら 是も 尾 登 根
沼と 田も 雪 浪 京と 世 水 事 取
才 鷹 津 富

年内立春

依 保 娘 此 男 い 世 々 々 々 乃 内 淡 々

むろけり 先 若 分 此 不 乃 主 於 津 富
水とや あり 一 を 公 年 と 岩 間 有 素 活

節分

目 ありん 之 ぬ 鬼 中 々 豆 も め 々 々 打 季 吟
考ら くの お 人 と 鳴 けり 陰 夜 の 待 貞 伸
豆 時 や 力 不 あ けり の 考 々 上 乾 什
悪 魔 を 世 々 々 々 世 々 々 々 腕 裏 雀
年 此 屋 不 改 々 々 々 初 々 赤 けり 亀 峰

歳暮

いけハあまを令く高し女と此書 四友
 月をよ見えとまを年乃流より 鬼貫
 日れ本儀人乃多由よ中此書 才磨
 とこのぬぐ漕を楫とけ所福不 未山
 管乃摺子本も阿まをく此市 柳居
 皆出来て帰向うちまをりそ年か 乾什
 念をうらあそりをうけ年乃書 乾代
 年波れよ向と初ぬや庶子申し 万英

空音何人あえやと一年此突 黠瑟
 年の初乃氣を慰めむ耐まら 青羊
 鶴流も待り夜ちと大二十日 公夷
 年乃尾や里に交まハ歎ちうく 栗堂
 多を向かしくや中くもりふ
 待流けぬ妻も初燈の紙ひと人
 大根うら松とそ馬も背にそり
 年乃夜や痛むけも惜流ぬも亦
 師老初をく満ち二十九日か
 阿とく自とりのしくむふ年古か

毎
 九 涼 仙 山
 九 山 禽 山
 簾 山

清子句也二川をくくく乃軸 寛麗
 月も月もあふ家や年未乃松
 夜を夜もはくそぬ江戶の野
 髪洗ふ子乃をなま也く浪音 菊千
 時をぬ道具をぬぬの音 何来
 行くと乃多アやゆハ事くもれと 律富
 月も月もあ御ハあや年乃音
 雪をくハ幾くハ神を後数年
 雪も年帰ハく教ふ志らんり 慮得

三十三年忌小

かぢあまハ親坊をくくくはく是 梅翁

画贊

次六乃浦の年名とのや案一把 芭蕉

坐右銘

行くとや登くくくくはくえ書 其角

誹諧句鑑拾遺 冬之部終

附録

冬之部

一陽井素外

薄く古傳石原や小春乃より山
届ふはや志くれを色もく仲の島
鴨ハ多らるる多き見合を村一々後
棟小まむ十初れ月や去如堂
本ら一にむせうや母よ本乃素猿
落葉一や多り多き一落とくゆ

晴氣存り一落葉を山
昔遺作不日も入りて枯野原
地為さるるは枯野のまらひ
冬枯や中をひり旅二人旅
夢むは人食入朝や何をうきねる
波波ぬ夜も多し次々破衝
かけ衝徒も多きむ記破やと
子多帰初や海をく海遠一
世に半治一人多るは也何ら
親ハ子れ多し限とくくけ

是るもや纏ふらるる人乃顔
酒ハ廊を渡ると目なり惠比次鎌
雨ハ初やまゝ雪又ぬれ去たは
いらくし月乃かひらも冬亦立
室月や我懐高雄け峯ふまむ
接初申や廊くも冬乃月
何さやふさ山空一初明く
風上きさ枝ゆえ乃山系空一
友とくしてよまき雲あり冬空
吹もま月ふも袖よらふあや

埋火の向きをさるるも初そ
霜のあちりやこしてぬる道
胡志やや其ハ枝く遠き乃針
枯葉ふさけくまとも志古れ相
まの雪乃初くも初や初明方
お乱をゆえれく其のむく馬
雪也蝶と梅ハあくれおと如
積色とや雪乃をく破列松
まらめり雪を月とを初とも
系を初め月と初りて由女

日不傍たる月もつらと雪れ山便居
室ハ早ゆきれ夜つらと森小啼
早凝るあれと降や空乃中
亦く走中風入凍る月夜も
空あくやゆり風も馬乃年
極寒ハ東氣明乃もち多く
陽をきけと天地や吹草葉
凍る也やふも遠せ一日乃氣
ささささや橙燈力らハいれひり
門て悔はる夜に空もぬる世也

あたるも知多をるや年計もめ男
喜あけもと縁籠もくふゆ記もる
去久世喜やまの島年をう後
ハおけも目も後こそのお終支後
帳前小人ぬさるるやうなる
年の初やんくまてりめる教子中
天おあふ地ハ大年の星月夜
鼓ても籠ぬハやうやいめ一宿

竹小井登

踊きく雪の茶盆はぬるもく

巻之廿五回忌

雪やあらぬ洞ふ糸を降りて

人生涯を旅とか久ハあふ日月日乃
味小中あふ

命ちりて久平去ゆ秋葉夜の降

高貴れ家子ハ佳例吉何と尋文に
年のいりきもま

燐とさきもりてさくや沖六名

附録冬之部終

追加四時混雜

夜もよき紀よもの多寐よ乃降 楓興

位よ〜あ〜

云見てもいよく古一岸れ松 来山

くをよ亦人汚一をさけるの雨

若葉や草履乃志め座座 治徳

梅枯くや二三人何、札乃过 治洲

梅後く日永一由久長今之 朔春

落花似蝶

ちりもよハい清き花胡蝶兒さくら 季吟

ちりまきりと様る城小朝片或
 山はらら後恋しき傍何む
 かけのふ片猫乃あさや夜さらら
 山吹や垣仕あてかー水浦
 桐乃木や遠ゆくへも思をぬ小
 いくとく死人の愛ふほろき次
 眞竹小のちとほ新や朝印け
 酒乃爛世ぬ人もあ初まら
 淋しとも伽子下りりる種れ書
 貞徳
 淡く
 惟中
 調和
 才磨
 其角
 惟中

集感之後は向くを拾ふよのて安小出さ

後叙

一陽井王公相前ふ古今白鑑と題せ四時法
 祭向集と著も此の集は祭場終尾ハ自序
 及び木丹の跋は述をくはし今却鄙お行きて
 於後篇やあると肆小尋よ依風安かうら凡
 と也さうらゝ茲小拾遺あらんあをを申椒堂
 をふ子謔しと此小冊を作も余熟覧する不
 先哲懐身く風情姿容前集と大不同しそ
 當世諸風子乃佳吟も亦然とまるとよ古々乃
 白鑑と云ひて是集ハ生白校書し傳りて老師々

句を附せし近年多病ゆて用紙もよて
已取取とあるを法つ生をがらひる京
拾ひ身低小権と若干れ十の一事黄紫角小啄之
先直笔子集と其後小附といふ事也

姪之齋 津富謹書

天明丙午初冬

少納言の君其冊子小迫くて遠きものよをて
ちうき地何れも其書を夫とのをふとてい
眼ふ耳小迫きもの公等類多くして何れも小
意を得る事きく見ふ小使小をき物小先葉
かくして作をともむる小迫る人予和丙申
の秋古今句温を拾補し天明丙午の冬同
拾遺を編む又拾遺とる事安永庚子に集
かの見ふ小使小をきものを藤画墨小殿に
其句をせへく名の枝物と題し各持ふ
とせり一門生初学を心くく初浅と傳

題の句はらぬ事をたもひすしすしあま
を中むふふ迎うらなも其化候をうらされ
あかしく系題をこころ輯め撰してけ秋
集たりぬ編意を名のをその後分毎
ぬらも句準を句鑑よりて將物の言を
ゆふけさまを句鑑附編と題し申極堂
何ふる事やりし思

玉池一陽井素外述

寛政四年壬子初秋

誹諧句鑑附編

春之部

正月

著衣始	きぎ始去虫敵をものめ小	玄音
國栖笛	ふ栖笛や子世の古き調子よく	栗堂
氷の様	谷を出て都よまつきくもつ後	素外
腹赤贅	田小水の息又厚し氷のためし	如水
門の神棚	腹赤贅ふ贅よふやつをし写	宝馬
	礼者小や破せたまはん門虫神	過橋

庭竈

敵意小て賑ふ民や庭かまと

芭蕉

庭うらと牛も鈍者を居るけり

其角

幸木

やも小焚ていさやまら幸木

紫蘭

屠蘇

と地の香や昔蒲も菊も匂とも

京もとめ

薫盒子

松の匂ふもとりまねいこ也薫盒子

歸鳳

おさうり

おさうりや軒をあらさぬ飾り葉

青羅

福藁

福うらや鷄もいぬつむさ布七布

左簾

福鍋

ふく鍋やつまこくをらへうと女う耳

古友

掛鯛

うけ鯛や魚木小のちる梅をいら

分香

太箸

ふと箸や小きいして居る思の也

津富

小一脊

いそふな子郭子候みさう船とて

素外

押船

を一船や橋いつら抱き宿の夷

木丹

開き豆

細き小年の花をやむらきま先

露水

夕節

夕節やかん酒いとの略しやめ

可笑

葩煎賣

たせ賣り舞のち際や風怪き

金露

星佛

気ももう夷や六と一の星をとけ

素竹

若恵比須

是也素のち若恵比須

梅翁

相似るる年のとけさるる思ひす

亀文

懸想文

賣や夷めてさき娘をむさひ文

冠軍女

を恵み喚ふ乳人を抱えよ

素外

大黒舞 たたこのむ犬黒まひや町もつま 蒼狐
 春駒 夾駒いさこやむらくまぶくろ 幡乃
 惠比須廻 浪さけや念ひすじ一う身の拍子 素曲
 猿引 女の足らぬこ筋の糸や猿引一 津翠
 水祝 相伴の猫もぬまものゝいそひ 津富
 帳書 帳うすや墨の光もも茶の湯 龜山
 藏開 つちのと虎実入をいそひ花むらき 立圃
 卷むらき曆もむらく梅むらく 竹舟
 削掛神事 削け毛る鞍煮も火のこしめ 住虎
 天狗宴 さうもて小天狗色を駭一や 素曆

畚卸 眼ハ肩ささぬハ及もさる畚おる 素順翁
 小松引 風情何で強くらぬぬ子小松むき 素外
 忍々摘 忍く摘てぬらもな都の正月名 芦錐
 暮蒿摘 をもきつむハある花ちう曲突煙る 金露路
 磯菜摘 大毒や糸麻染うきこけて磯菜つて 野幣
 白馬 馬も青む庭や白うのそらまふ 文雀
 阿をるややも仕丁う神の業 亀全
 十日惠比須 毎又宝つるや念ひまの女産お 素周
 縣 召 五位子叙せと湯ハ先友縁め一 素尺
 常陸帯 こ小又むさふハ重垣むさち草 左簾

經引 勝方子交りや去も運ぶ心 徳 煮徳
 左義長 左義長や戦子まらまけの姿 其葉
 粥杖 かた杖やうらハ折きかん妹々 腰 一鼎
 粥占 うらうらや天地をまかる 爰の穴 煮外
 踏歌 春ハ何らまきハ縁の春白き 山町
 下萌 下とえや尻こぢえゆく 踏る雪 二川
 若緑 住むのまつ代おろろみとて 維舟
 藕を掘 急ハ根小味ハ今中えちまほり 伴已
 泊り山 爰と維の姿をまや泊り山 祇井
 朝鷹 胡鷹や春まこふ日の揚気 煮云

附 四

継尾 種ハつまぬ 種まらや尾は歌ま 宝馬
 三春ニくもはもの
 佐保姫 さは非の火燄斗やうけ海の西 煮外
 鶯 春ハ鶯小隙う翠むく鳥の爪 李冠
 駒鳥 こま鳥や急まはらていむ声 路洲
 蜷 夾めける春う古風をこ 蜷うり 煮伸
 す蛤 住よのすこ小雀やまたまき 才磨
 鮎膾 鮎なまを骨正月もさのふ外 津富
 嫁菜 袴美一去まふ 恥よ嫁をき、

二月

釋奠	釈菜や上下奠ても唐の式	文洞
二日灸	あろろよや山は灸存の二日月	花來
二月堂取	水滂玉多接くのどやくも	江永
積塔	石も玉つむをま珠を塔の敷	吐鳳
貝寄風	貝とせやなまくさくても法の風	煮后
治聾酒	小風を碎貝吹よる妻なるら	川町
水口祭	苦からし先治聾酒の只のこり	涼山
種井	名口小ぬさや古田志るか(一)	宝馬
燒野	傳ふ来一場石や種井のよ日佳	雅郊
	神を燒う稀ふとも色る維香ひ	煮盈

附五

在る薄	見えたるぬたやまろのすくさ原	煮芥
たこ鳥	たか鳥や明をなきゆふこと山	曾良
又 か不鳥	又 ささる勢木も妻たさやかほを鳥	左藤
又 うほ鳥	又 う不鳥や無のやつをさし啼	水蛙
引雀	引雀やあす一かすも胡乃海	妻琴
雀子	雀由急子持とるや朝のほま	作者 ちん
初雷	雷も妻うそり春のふまつ	己禮
蛇	阿ふの目忠何を懐りて子合照	支考
田螺	畔陰や漕出を田ひし入る田塚	吳龍

三月

寒食 寒食や破り終りて出ーを益見 龜長
 柵鬘 肩より柵うつらやうはひ鬘 冬嶺
 巴字蓋 さうつきも終ふや巴の字ままさう
 羽觴を飛々 起句清句魚いやいとる小らふむ益 酒來
 土佐の汐干 古佐枝の吉備系や 復や 才磨
 鞞 鞞 ぶらとやゆらく 菘の益とる 何來
 踏青 世路をきく維も青きをふむ益を 雀子
 葉櫻 益を抱く紫をせさうらう右角親 素外
 葉柵 葉さくらや益の白きを后ふさく 素活
 紫子をらく夾や柵のおとあーと 徒洲

木蓮花 ともきんけ純を雨を吸ふに字 千那
 犬櫻 立あーくは答めや大さくら 千枝尼
 眉作りの花 眉をきもゆふは烟の馬乃雨 乙由
 菊植替 いろ糸をくろふ菊の分根り助 祇丞
 菊苗やまけても今いふと川名 素五
 櫻魚 木よさうて竹は吸ひて 櫻魚 冬典
 櫻貝 益透ふら小送ふやさくら 魚 琴志女
 鴨をさやさうとの名を貝の鱗 素英
 杜鵑の巢 益を 小杜鵑の巢の益不とさ 霞外

川魚ハむとちの益さくら川の産也
 申ひさー千魚と名して素外に生也

上り築 かゝくもをさなき魚をより築 合浦
 雲入鳥 名もく入るやまちる存の雲 鷹里
 志き霜 入月のおほろ残るやまき霜 和水
 又 別き霜 天地の化雅納めやまこれお 傳賤

夏之部

四月

青簾 若葉ふく大内山や青きまき 亀文
 新一の友やまきまきまきくと 素磨
 鷹の埒入 この日よりの勢も安居を埒の内 素外

練供養 仏体も人を汗の杯に供養 素全
 葵 祭 神系る時よあひやかさ一ふも 素芹
 餘 花 西山を海花けり及もまこ小神 冠重女
 若葉の花 若葉けりあまを葉よさへ福を何と 素云
 木の下閣 けり葉して葉よままや朝日和 如水
 つくら葉 結の葉の風をまき一木下やま 谷木
 櫻の實 雪のほふるやあらまきと櫻の實 鷹朝
 柳 花 かきの葉落てうくまえられらる 助叟
 三年の枕粟流一かきのえを 万叶女

桐花

聖代のゆくまのいろや桐の花 冬典

橘

中しくふりてもも稀きまのま 素外

鶯尾

白くらの蝶も交るや志やうのむ 楚分

一八

いちをゆや何を種として登根の上 李趙

五卷葛

藤一や玉をまき紫のまの首系 寛之

同芭蕉

玉巻て又もるて世紙や紫の蒼と 宝馬

蓮の浮葉

先ッ急の坐をとる甚のうき紫汁 涼城

蚕のまゆ

蝶と化も羨やかいこのまゆの内 素外

蜘蛛の子

くものこや袋を出ると風を灰女 菊旦

松前渡

ま川あやうるとききけは何多し 吳外

三夏こころの情もの

單羽織

薄うして何川き事あらは夏羽織 梅翁

日傘

内りまやまの梅ぬかっら日傘 素外

切麥

きり麦や冷く腋へ落る 素玉

子又

梅ありや壺中小何めの一世界 津富

蚋

おろろーや系ふもぶ中と産生門 士藤

蚊

血をまけー方と八思ハま蚊の憎さ 丈草

青鷺

青鷺や美あうら香よ涼一 百志

夏籠

大もろー百日紅のちる日まて 支考

茗草 ちきくや女冊子忠杖のいろ 鷺水
蕨菜 やまの交りて生るはうさ小 宝馬
葛菜 やまの上ふをくさるもの 東林

五月

粽 蜘蛛似るものふるまひや毎ちま死 涼俗
薬玉 くまのまの柳さくららの綿々も 冬嶺
競駢 乃くてまの又ぬ草をきせひう里 素調
竹酔日 むまや竹も殊ふ日の人集め 其角
帷子 かこむらやまぬは白を下しくも 津富
辻が花 日の色も深て是涼し過るをか 亀全

栗花

栗花 むふふ行基の席や栗のまを 左簾
合観花 栗のまのき浪えせり日和風 津蛙
山梔子花 眉柳の紅粉の藤相を祢ふのま 左簾
忍冬花 くらあーや白きをささ小花の色 文洞
金銀花 色涼し口ふほいのすいつら 素外
紅花 さいやまを白いや露の令浪花 芭蕉
莓花 けまの淮肌ふまを厚ふのまな 希因
水馬 筒井筒朽小けらーを志何のま 一馬
蛇の衣脱 只まふ二つとあまぬますまー 江永
ぬき捨てあえーや岩小蛇のきぬ

寫の音入

うひまや音をいきて只青い鳥 鬼貫

常も然るや栲多末月日星 雀声

鹿の兒

富小迷ふ穠師ハ麻の子由忍小 作者

里まきくねふや山中裾かのこ 涼山

鯰狩

ねらひ狩るふま坐や富の麻 素云

照射

いさ里火よおこそ移れども一精 津富

火串

山の尾小火串や麻を化はももの 木丹

五月闇

ゆきは鉄壁や何らん華月やこ 雅郊

人よ眼を一天地不同なりさつち富 吐鳳

黒まへ

黒まへや帆小ハおもくも走る風 素外

附十

白まへ

志ろまへや沖小生らる島をとり 栗堂

六月

氷の御膳

暖喰りさ一刃の時氷のおもの 素外

江戸山王祭

番附を賣るも糸のきほひ小 其角

嘉定喰

十六の鬼も又るや嘉定喰ひ 素外

鞍馬竹伐

蛇をら骨節も又るり小きるや竹

天満御被

川の灯小照るや天満の夜まつ里 龜長

青嵐

青白く又るや湖多の青河原 麴人

泉

目さま一の泉や暑氣吹かひさま里 山鳥

齒をいどふ人ハとも河まけいつこ 公佐

滝殿

くさ月小富や流又の後送り

桂峩

滝後や我日乃もとの字白蓮

素外

さら井

さら井や涌出るもよ玉のま

宝馬

川狩

川狩子青砥う後よ雑魚おー

佐保丸

四ッ手網

搦迫うくもよふけり口よ何と

素外

水母取

浪のまよ月をつむやらけれ

舟子

雲雀鷹

むそも天ふうとき時そ仰や響鳴物

雨橋

練雲雀

練雲雀のこ思をそや後よ藍をけ

芝水

こゝ絲虫

あなまきを絶子やうへりこねむ

十人

火取虫

あともをやくといかーや夏の虫

春可

まはのり
花のしん
梅とま

毛虫

蜜をやうらふーくく穴とり虫

希言

竹の皮脱

まゆ作ら毛むーや蚕の胤か

津富

百日紅

あまハ咲きくーて 百日紅

素緑

射干

むゆふきやかさまへき紫の上よ

ちよ尼

慈姑

まよまの運びもこや風かつま

呉龍

赤草

あうまや夕日よ重きまの

賀重

風蘭

風葉や北う吹ても不のうほ

重厚

瓢箪

夕露のいまもの咲やそねむさこ

悟隆

英富

藍	川	藍うらや人ハ黒く日小深	素絢
麻		暑と足せて暑さ助けよ操麻	素東
林	楠	麻刈や直きあゝろの鞆子つぎ	宝馬
		ふふとも林檎ハ種てかもしろ	其角
新	干瓢	干瓢を干きや信濃の宮の竿	素外
夏	切茶	葎きその壺のかやまや蓮花王	維舟
醴		ことま子とをいふる宿や一軟さけ	宝馬
		さくとぬふハ是うをいぬとよほ	女 <small>ミ</small> かう
心	太	志う之ハふも角やどころてん	廬元
夏	日	むやくと蟻をふまへて益麻小	芭蕉

附 三

秋之部

七月

北野御手水	神ころく心や北野の捧けろ	栗堂
同煤拂	煤非ハむまハ糸る危星の袂	江永
硯洗	硯ぎの敷をもけらへる習ひ子	琴志女
机洗	星の袂子やよや机の臺あう	川町
施餓鬼	なき人の名こそ流きてあせき	宗信
犬飼星	吼るあよ犬ハ星の意も尚あ	素外
薫姫	たきものうをよハ名やめふれい	左簾
百子姫	星もけら夜の媚やもくと娘	木丹

紅葉の橋 鄒澤ふらぬをやこころの橋の上 青羅
 七箇の池 新移を早やたつこの池のを 津富
 峯入 送る子や雖も苦行鯉をを 一門
 荷の飯 多舟やくくまいる蓮のいひ 治部卿
 文月やめてたくくくすの版 作者
 家よりまきと背山のもらぬき蓮の版 志らに
 刺 鯖 を一鱗やとむ魚あらは比翼をも 百志
 三井寺女詣 少ふむと日女もをちる三井 清 亀長
 水燈會 影流る星を河辺のあり灯を 津富
 大文字の火 水に画も出ってや大と火の形 素五

附 三

舟形の火 大文字や送る火の字と見らうちふ 素外
 閻魔参 舟忌中火の火のくく 素調
 つゆ入 舌ぬきむ忍んまふそのせらとを佛 文洞
 鷄坂祭 片と入やむく一羽の敷とほ 涼山
 撰 待 筑戸なら路かくを尻に杖 素外
 田畑の虫送 せつといやあささ八字治乃好拾きも
 冷 麥 松明の火ふきとてやき一送る 津富
 喜小あくハ名系て結きむ一送る 歸鳳
 むやむきやゆらりのころる膳のうへ 支考
 冷 麥のあふもや先ッ井戸を巻 素琴女

青楓	こもものといそめ色や青久て	過橋
敗荷	香ふ花も一風をかくさや破きす	ト人
盗梯	あふつきや年く冷て又るころ	為文 <small>京</small>
西瓜	内や赤一内も何か一と西瓜うを	素外
鷹の時出	淵出て何らこ涼一鷹の眼も	亀文
あり鷹	何ら鷹のつらさ小怪一富士もろ一	左簾
初鷹狩	惜乱を一建治のまふ心あつるか	三曉
初鳥狩	稲多紫のまをろくをことと持	輕舟
秋蝶	帷子のかさぬ糸一を秋の蝶	支考
秋螢	秋のゆき虫底なるあつころ	一笑

附 十五

三秋こももの

立田姫	減深一中山や風よの山田姫	祇井
律の調	さる浪や志らふころの琵琶の調	宝馬
菘	菘の紫や青いうちら枯一喜	蝶夢 <small>京</small>
葛	と葛もまひのちるやけそ一奥吉野	露水
同葉	日おもてを月の紫うらや葛の秋	左簾
葛	こもものほろつき世は遠一壁の葛	柀居
若烟草	煙下も香をえてや止こはむ若煙家	重貞
絲瓜	何けほのほろも糸よも秋たをこ	龜山
瓜	何ちまとも思はて生るやけ秋を	素后

類赤	五十雀	四十雀	色鳥	種瓢	唐柁	荔支	藥掘	芦花
もこち小や破一木阿のいろ上戸	法堂里もふ別借らそ又十う死	老の名乃まとも志らて四十雀	いろ多や喰こふ其もの皆赤一	不形ても熱飲生りそ半杯かく強	有きむや朝陽の萩乃五ち久	口咽一きいーや秋の異さきま	蛇のちめる草又てわるや茶不也	幸回いんちも居る播場芦の茎
其葉	千枝尾	芭蕉	白芝	宝馬	芭蕉	金露	宝馬	素外

類白	目白	鷄	翡翠	啄木鳥	菊頂	火燒鳥	木兎	落鮎	下り築
赤くけ小啼やほろの娘歌	曾也くや一赤つ小啼目一ろ	玄えちる南天折を実ハやらそ	川せとハ草本の外在と川田非	ちちちすち中小色又てらつつき	侍ててん菊いそきかさつつきも	刈一芦のまかそ、ぬおむさきも	こつくの豆や目の漆耳の用	落はちやまこち里残る柳をえ	運ハ横小せきちり魚や下り築
桂峩	稚郊	山木	素願翁	傳賤	冠軍女	賀重	素外	如水	其富

九月

後の雛

茶う又梳ハ熟クして此の雛

五璉

根分て一菊咲小けり好のむる

左簾

御難の餅

重箱のり河川や胡麻の候

素芥

宝の市

元まても宝の市や二夜月

冬典

太秦牛祭

院宣小何をほゆる先牛由つて

素云

伊勢新嘗會

神風の伊勢此の字よ福初候

吐鳳

住吉神送

松雪く宮すこよ一恋小まつて

素外

野宮の別

神の文やおまの小様さしもく小

津富

桂川の御枝

西川や侍後を枝のそ川と向

木丹

附

十七

残菊

けふむやまの菊乃遠い酒

亀全

衣掛も菊の香残り十日香

和水

熟柿

腸小秋の志とさる志也くく小

支考

日小雨小を味ひの熟柿く系

素竹

秋田

むつち田の實のまを麻一々日新

楚分

落一水

月影を田毎も今やおとくく小

左簾

露霜

露もおや草小冬めく日の後を

呉龍

霜踏鹿

赤いむや草程をま朝を麻

素磨

尾越の鴨

待文て存や尾こーのかもの存

素徳

紅葉鮎

川苔の耐るや深るもとらふな

貞徳

崩築 雀翼の備へもなきは川を海へ
番船 香ふねや帆は志ら雲よ競ひ飛小 素英

冬之部

十月

神送 夕朝ハ造酒吞て捧げん神送り 沾涼
神の旅 北風小日の弱くやー神の核 素外
御影講 月影講や夕夕餅子小をる穴 霞外
大社神集 冬かさる清玄式月夜風もかー 素外
屋さてをややそハ重垣の神何つめ 亀全

附十八

八手の花 神立の浦よむらふや女男の浪 公佐
枇杷花 たくまーくハッハ急ハ旅小けり 尚白
鶯の子鳴 冬は行くハ年ホの質氣をたのま 素外
三冬ニゴトハ侍もの まかき吹もいつまを吹を子らへい 素五

炭 真炭より大著の芥の幽々也 其角
湯婆 何うつきの半ん不や籠もさめかて 吐鳳
綿帽子 心からたかくかむるや縁をり 冠車女
はめたき 大ハ石を冷さき旅を古まら 素外
互 海底子屋へ心影やさる月 左簾

莖 漬

磨の石乃かそくもあしき漬

万叶女

葱

かひしし嫁うま業子莖菜漬
祢きも袴いませるうま麻て漬き

何來

蕪

葱汁や大納屋人をぬく草
土かすら玉麻草さきハむるもか

宝馬

くすら野

くすら野やぬもろくくす海

涼山

鷹

風は増たまきや海鳥のやまき飲

左簾

追鳥狩

目を寝る小追鳥かまや列卒の執

雀舟

氷 魚

字治くゆく氷魚や精る菜ゆらひ

素全

かア火子解けや白き細の氷魚

麴人

附 十九

柴 漬

ふー柴のふりもや魚の冬冬漬

栗堂

鱧

あつらと待や越路の魚荷馬

素外

石 花

白くと文字の片身や雪の魚

素緑

鯨

貝の岩をむけもいさものあふ坊

素尺

鯨

七さきの富も鯨のゆらう素

宝馬

蕪

振の川とくすららの脊山沖運一

希言

蕎麥湯

ふろさきや実湯のうまの肌ころ

如水

生 姜 酒

ほのこまと下戸も持て西小孫付根や

一門

生 姜 酒

風の神小辛きめえせむ生姜酒

亀文

蕪

葉ーやうろのふとくを生姜酒

素磨

蕪大根
風呂吹

霰酒 けふも又雪まじり萩やゆらき酒 冬共
 雲酒 のむきゆる古小あらしぬとれ酒 文洞
 神々よやとる陶子やとれ酒 江永

十一月

子灯心 たまふとさきもをり子灯心 雅郊
 吹草祭 くらげとさふいと糸を根おし 合浦
 大師講 思ひつぎ淵を伝ふや大伴漢 雀子
 志まき 志まきとる雪や替く芳乃海 可笑
 雪車 高みてこも紙の跡や雪の灘 亀長
 櫓 かきそく人をや雪の浮人形 素外

附 九

十二月

臘梅 梅 痛梅や日々入くうらもつきまど 吳龍
 寒竹の子 寒竹の子や立習ふ雪の中 素苜
 箕田鯉取 このまの鯉や呼乞のつと取 士藤
 八首鱸取 ハツかうら目をくらまきや細丸 素云
 大寒 大寒や握り杖の受えさへ 津富
 凍り鮎 堅凍の孝ハむりてわくまふか 素絢
 寒晒 寒晒らり氷らぬもハ日子白 津蛙
 寒作 氷の中ハ浦夜やを流る雪 情隆
 産の寒小梅も蒸るや雪つくも 雀声

寒声	猿人のなききりや瀬田の橋	桃妖
藥餅	朝麻さるく子倉せしをからす	琴洲
乙子餅	乙子餅小僧や伯父甥をさうす	津富
臘八	臘八や瘦ハ佛ハ似せりとも	支考
寒垢離	臘八やせめて巨魁の山を出む	閑芝
正月事始	空にこりや髪いともその生不動	素外
大原雜魚床	冬より青きう夾の事はし先	素周
終差	大原やここぬもいと名忠梅	素人
獲枕	悪魔をらふ夜とて極もき腕	伴巳
	去よよい美冷強せ獲まきら	舟子

附 九一

齋宮罵掛	縁うの占も豊年の夜ういぬ積む	素外
和布刈神事	年も取ふ和布刈の漁の一むく	寛之
五宗天神祭	醫志ハ居積神ハをけらをくれ冬	佐保丸
年籠	殺石戸おも小むと叔やいせり年籠	素琴女
札納	法入て墓より更字や札納先	巴静
衣賦	紫を姉を奪ひや衣くを	素外
米洗	志ら雪小負ぬえ氣や米洗	
岡見	足見えりくや画々を判しもの	

誹諧句鑑附編終

玉他河翁と年々子編集河孝いつれも
 世より行をり交り申ふ古人の句鑒を
 集中し何う白なる生白校書ある時
 附録として後子加ふ拾遺も亦然り
 辨高の跋子毒一さるるハ名の知折忠
 例の傲いすく史く題の足らざるを補
 とし尚事ふなりぬ且己子清書を絶を
 何年然心か半くくはくくをさる華を
 少くも傳る也

山中素云謹誌

附九二

留本在六朝

